講座報告

アニマルウェルフェアによる畜産革命を

滝川 康治

物心がついた1960年代、戦後開拓のわが家では、乳牛や農耕馬、鶏、羊と一緒に暮らしていた。少年の家の手伝いは、牛の乳搾りや牧草の収穫、餌やりや糞出し、田植えや稲刈り…と何でもありだ。家畜のことを〝経済動物〟と呼ぶ人はいなかったように思う。

動物たちとの距離が近かった農村生活が変容していくのは、70年代以降のことだ。機械化・多頭化による規模拡大を進め、借金を返すために更なる生産拡大に走る……。農家はそれを悪循環とは気づかず、政府や地方自治体、関係業界は拡大路線を後押ししてきた。

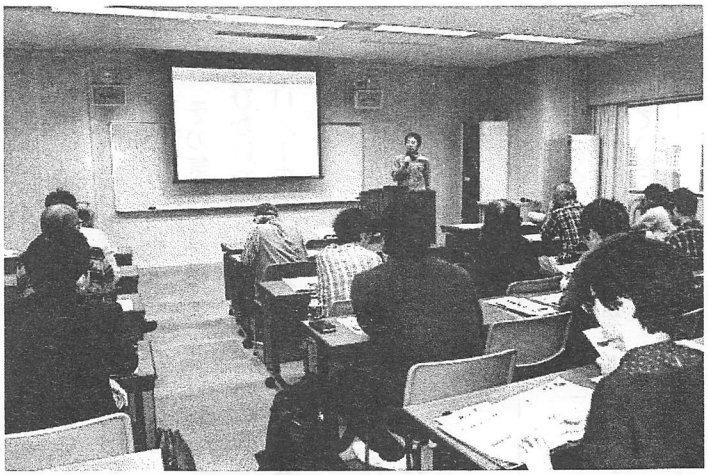
この間、最も犠牲にされたのは家畜たちだろう。動物行動学者の佐藤衆介さんは、日本のアニマルウェルフェア（家畜福祉）の問題点は「拘束」と「濃厚飼料の多給」だと指摘する。北海道でも、庭先養鶏が激減し、ケージ飼育が主流になった。繁殖豚は、狭いストールに閉じ込められ、身動きもままならない。

草が主食の乳牛は、ミルク・マシーンとして扱われている。80年代初めの道内の乳牛1頭あたり年間平均乳量は6千6百キロ程度。それが2015年には9千5百キロに急伸した。米国産トウモロコシなど濃厚飼料の給与量を増やしたからだ。その結果、第四胃変位や脂肪肝などの生産病が増えている。

近年、犬や猫など伴侶動物のアニマルウェルフェアに対する関心が高まり、関係法令も徐々に改善されてきた。しかし、家畜は犬猫以下の扱いをされ、動物愛護管理法の整備も進まない。生産者やフードチェーン関係者、消費者の認知度は低いのが実態だ。

そんな状況に一石を投じ、「酪農・畜産王国」といわれる北海道から畜産改革を進めたい―。こう考える私は5年前、「北海道・農業と動物福祉の研究会」を仲間たちと設立。その後、会を法人化し、認証制度づくりにも参画してきた。

10月26日に開講する「遊」の連続講座に先立ち、欧米で進むアニマルウェルフェアによる「畜産革命」の状況を、松木洋一さん（日本獣医生命科学大名誉教授）に講演してもらった。来年2月まで月1回（全5回）の連続講座では、家畜福祉の基礎に始まり、ペットフードの原材料や「食の安全・安心」、放牧酪農の有利性、消費者から見た課題などを学ぶ。アニマルウェルフェアの関連領域は、放牧や有機畜産、動物と人間との関係、獣医学のあり方、持続可能な開発目標（SDGs）、消費者意識…と幅広い。受講を歓迎します。



松木洋一さん講演会「家畜は感受性のある生命存在だ！」
（2019年10月5日、かでる2・7にて）

滝川 康治（たきかわ こうじ）
1954年、下川町生まれ。子ども時代から身近に家畜がいた。農業高校を卒業するが、道を踏み外し、今はフリーのルポライター。家畜福祉の普及活動に取り組む。